

二つの『赤光』(二)

―初版『赤光』削除歌の位相―

安 森 敏 隆

(一)

斎藤茂吉の第一歌集『赤光』は似て非なる二つの『赤光』がある、とみなしたほうがよさそうである。一つは初版『赤光』であり、もう一つは改選版『赤光』である。

さらに、詳しくいうと、初版『赤光』は、

・大正二年(一九一三)一〇月一五日、初版(東雲堂書店刊) 四六
判本文三一二頁 アララギ叢書第二編 定価九〇銭)

・大正四年七月一日 再版(東雲堂書店刊)

・大正七年五月二〇日 三版(東雲堂書店刊)

・大正八年三月二〇日 四版(東雲堂書店刊)

・大正八年一月一〇日 五版(東雲堂書店刊)

以上のように大正二年十月十五日より大正八年十一月十日までの間に、「後記」(『赤光』再版に際して)、「赤光」三版に際して)や表紙の背の紙を替えたり、追加したりしながら五版を重ねた。ついで、

・大正一〇年(一九二二)十一月一日 改選一版(東雲堂書店刊)

二つの『赤光』(一) 初版『赤光』削除歌の位相―

四六判 本文二八八頁 定価二円三〇銭)
大正十八年になって、これまでとは、まったく違った改選『赤光』の刊行ということになるのである。

初版『赤光』は明治三十八年から大正二年八月までの作から八百三十四首を逆年代順(最後の明治三十八年と四十二年までは一括して編年体)に編纂し、それに対し改選版『赤光』は同時期の作に、かなり大幅な改訂・改作を加え、配列のしかたも最初期のものから編年体でくまるといふようになった。違ふ編纂をしたのである。だが、そうしたことにままして「似て非なる二つの『赤光』がある」とみなしたほうがよい理由は、初版から改選版『赤光』にうつるとき、全体における約一割弱の初版『赤光』では特徴ある七十六首の歌が削除されていることである。この削除歌の数について柴生田稔氏は「初版の歌八百三十四首のうち七十五首を削除し、明治四十一年作の『壙原行』の中に『あまつ日は山のいただきを照らしたりふかきはまの道のつゆじも』という一首を補って、この改選版の歌数は七百六十首となった。(『斎藤茂吉書誌・年譜』(傍点筆者)と述べられているのが定説になっているが、この『壙原行』は初版も改選版もと

もに歌の数としては四十四首あり、その移動は、柴生田氏が言われるように、改選版では「あまつ日は山のいただきを照らしたりふかき峽間の道のつゆじも」の一首が新しい作品として補なわれているかわりに、初版の方から「玉ゆらのうれしごころもとはの世へ消えなく行かむはかなむ勿れ」の一首が削除されているのでプラス・マイナス零となり、四十四首の実数にはかわりがないことになる。私の見解によれば、そのかわり明治四十二年作の「細り身」中の「まことわれ癒えぬともへば群ぎものころの奥が悲しみ湧くも」と、つづく「やまひ去り嬉しみ居ればほのぼのに心ぐけくもなりて来るかも」の二首が初版から削除され、そのかわり改選版では「おとろへて寝床ふしどの上にものおもふ悲しきかなや蠅の飛ぶさへ」の一首が削除された二首のかわりに増補されたとみなされる。とすると初版の歌八百三十四首のうち七十六首を削除し、明治四十一年作の「鹽原行」の中の柴生田氏が示摘された一首と明治四十二年作の「細り身」中の一首の計二首を補って、改選版「赤光」の歌数は七百六十首となるのである。

先ず削除歌七十六首について小題とその数をあげてみると次のようになる。

- 大正二年
- 麥奴（十六首）……………8首（削除歌数、以下同断）
- きさらぎの日（十一首）……………3首
- 女學院門前（五首）……………5首
- 吳竹の根岸の里（十一首）……………3首

- 大正元年。明治四十五年
- 宮益坂（八首）……………6首
- 海邊にて（二十三首）……………3首
- 兩國（八首）……………8首
- 犬の長鳴（八首）……………3首
- 木こり（十七首）……………9首
- 明治四十四年
- 秋の夜ごろ（二十首）……………3首
- 折に觸れて（二十首）……………3首
- 遠き世のガレーヌス……………2首
- 明治四十三年
- 田螺と慧星（十一首）……………3首
- 南蠻男（十二首）……………11首
- をさな妻（十四首）……………3首
- 自明治三十八年至明治四十二年
- 鹽原行（四十四首）……………1首
- 細り身（三十五首）……………2首
- 年代別に削除歌の数をみると、大正二年が19首、大正元年と明治四十五年が29首、明治四十四年が8首、明治四十三年が17首、自明治三十八年至明治四十二年が三首となっている。さらに、これらのうち改選版において全歌が削除抹消されたものは「女學院門前」（五首）「兩國」（八首）「遠き世のガレーヌス……………」（二首）「南蠻男」（十一首）の計二十六首であり、あとの五十首は部分削除され

たものであることが解る。

ここでは、以上あげた削除歌七十六首とその一連である全歌を掲出することにより、初版「赤光」の特徴、ひいては改選版「赤光」の編纂意図からみた削除歌の位相について分析を加えてみたいと思う。

(二)

麥 奴

しみじみと汗ふきにけり監獄のあかき煉瓦にさみだれは降り
雨空に煙上りて久しかりこれやこの日の午時ちかみかも
飯かしぐ煙ならむと鉛筆の秀を研ぎて居て煙を見るも

病監の窓の下びに紫陽花が咲き、折をり風は吹き行きにけり
ひた赤し煉瓦の塀はひた赤し 女刺しし男に物いひ居れば

監房より今しがた來し囚人はわがまへにゐてやや笑めるかも

巻尺を囚人のあたまに当て居りて風吹き来しに外面を見たり

ほほけたる囚人の眼のやや光り女を云ふかも刺しし女を

相群れてべにがら色の囚人は往きにけるかも入り目赤ければ

まはりみち畑にのぼればくろぐるど 麥奴は棄てられにけり

光もて囚人の瞳でらしたりこの囚人を顧ざるべからず

けふの日は何も答へず板の上に 瞳を落すこの男はや

紺いろの囚人の群笠かむり草刈るゆゑに光るその鎌

監獄に通ひ来しより幾日經し 蜘蛛啼きたり二つ啼きたり

よごれたる門札おきて急ぎたれ八尺入りつ日ゆららに紅し

微毒のひそみ流るる血液を彼の男より採りて持ちたり (七月作)
殺人未遂被告某の精神状態鑑定を命ぜられて某監獄に

通ひ居たる時、折にふれて詠みすてたるものなり。

(ゴヂック活字の歌は削除歌・以下同断)

巢鴨刑務所に出むいて精神鑑定をするという、精神病学研究者としての茂吉の独特の世界がうたわれているのであるが、初版「赤光」(以下「初版」とのみ表記する場合もある)十六首の中からちようど半分の八首の歌が削除されている。さらに最後に付された「殺人未遂某の」ではじまる詞書も、あまりにも強烈で露骨なもの言いのために削除されたものと思われる。削除された八首の歌の特徴を詞書との関係でとりあげると、「女刺しし男」「巻尺を囚人のあたまに當て居りて」「女を云ふかも刺しし女を」「べにがら色の囚人」「けふの日は何も答へず」「よごれたる門札」「微毒のひそみ流るる血液」という具合に、これまた囚人を直接に素材にした強烈な事件と風景と状況をあらわにあつかったと思われる作品を、とりわけ削除している。ただ、こうした中から、一首だけ「雨空に煙上りて久しかりこれやこの日の午時ちかみかも」という着実な写生歌がはぶかれている。地眼的意味しか認められないゆゑの削除かも知れない。このようにして改選「赤光」(以下「改選」とのみ表記する場合もある)に残された八首のうち、監獄や囚人をうたつていながら「監獄のあかき煉瓦にさみだれは降り」「紺いろの囚人の群笠かむり草刈るゆゑに」等の歌に代表されるように、自然の側の「さみだれ」や「草刈る」という風景の点景としてうたわれた自然詠ともみられる作品の羅列ということになるのである。

きさらぎの日

きやう院を早くまかりてひさびさに街を歩めばひかり目に染む
平凡に涙をおとす耶蘇兵士あかき下衣を着たりけるかも
きさらぎの天のひかりに飛行船ニコライでらの上を走れり
杵あまた並べばかなし一概につばの白米に落ち居たりけり
杵あまた馬のかうべの形せりつばの白米に落ちにけるかも
もろともに天を見上げし耶蘇士官あかき下衣の悲しかるかも
きさらぎの市路を来つつほのぼのと紅き下衣の悲しかるかも
救世軍のをとこ兵士はくれなるの下衣着たれば何とすべむ
まぼしげに空に見入りし女あり黄色のふね天馳せゆけば
二月ぞら黄いろき船が飛びたればしみじみとをんなに口觸るか
なや

この身は何か知らねどいとほしく夜おそくゐて爪きりにけり

(二月作)

「きさらぎの日」一連十一首は、二月のある日、茂吉が巢鴨病院
を早退して街にでて救世軍や飛行船などの異国の風物をめずらしみ
ながら詠んだものである。このうち、「改選」では三首を削除して
いる。五首目の「杵あまた馬のかうべ」の削除は四首目との素材・
内容の重複をさけての削除であろう。七、八首目の削除も六首目の
「あかき下衣」の重複をさけ、さらに一首としての自立性の稀薄
さ——一首のみでは両首とも漠然として意味をなさない——ゆえの
削除かとも思われる。

さらに九首目の「まぼしげに空に見入りし女あり黄色のふね

天馳せゆけば」という白昼夢めいた女の恋唄は削除をまぬがれて幻
想をほしいままにたもっているが、つづく十首目の「二月ぞら黄
いろき船が飛びたればしみじみとをんなに口觸るかなや」は、改選
では「二月ぞら黄いろき船が飛びたればしみじみとして、女を思ふ」
と、初版の官能的な感覚を常識的な「思い」の歌に改作し、自然な
恋唄にしたてて処理している。

女学院門前

売薬商人しろき帽子をかかぶりて歌ひしかもよ薬のうたを
売薬商人くすりを売ると足竝をそろへて歌をうたひけるかも
驢馬にのる少年の眼はかがやけり薬のうたは向うにきこゆ
芝生には小松きよらに生ひたれば人間道の薬かなしも
あかねさす屋なりしかば少女らのふりはへ袖はながかりしかも

(三月作)

ここで歌われている「女学院」は、青山女学院のことであり、当
時青山脳病院の近くの赤坂区青山南町七丁目にあり、茂吉はよくそ
の前を通ったものと思われる。この一連は五首とも全部削除され
た。もともとこれらの作品の初出は「アララギ」(大2・3)に八
首の連作として載っており、その中から、
女学院のいらかのうへにひさかたの清稚ひかりたゆたへるかな
さにづらふ少女のともはもろともに行きの調練してを居りけり
ほれ葉醫慮のくすり氣ちがひの感応ぐわんとうたひあげたり

の三首が「初版」では、はぶかれており、本来の題名である「女學院門前」という素材とモチーフがうすらぎ、全体としては売薬商人の歌へと転化してしまつたものである。「初版」の時は、このアンバランスのかもしれないが、「改選」時はこの題名と内容のアンバランスが逆に鼻につてしかたなかつたものと思われる。

呉竹の根岸の里

にんげんの赤子あかこを負へる子守居こもりりこの子守こもりはも笑はざりけり
日あたれば根岸の里の川べりの青露あせのたう揺りたつらんか
くれたけの根岸里への春浅はるあさみ屋上の雪凝ゆきこりてうごかず

天あめのなか光あかりりは出でて今はいま雪ゆきさんらんとかがやきにけり
角兵衛かくべゑのをさな童わらわのをさなさに涙なみだながれて我われは見んとす
笛ふえの音ねのとりほろると鳴りたれば紅色こうしよくの獅子ししあらはれにけり
いとけなき額ひたひのうへにくれなるの獅子ししの頭あたまを見そめしかもよ
春はるのかぜ吹きたるならむ目のもの光ひかりのなかに塵ちりうごく見ゆ
ながらふる日光ひかりのなか一ひといろに我われのいのちのめぐるなりけり
あかあかと日輪てん天あめにまはりしが猫ねこやなぎこそひかりそめぬれ
くれなるの獅子ししのあたたまは天あめなるや廻くわいて転くわう光くわうにぬれあたりけり

(一月作)

「呉竹の根岸の里」は、正岡子規の上根岸にある旧居を訪れた途上みちでみたものを、ありのままに写生した一連である。「改選」では

二つの「赤光」(一) 初版「赤光」削除歌の位相

題名も、単純化されて「根岸の里」とのみなっている。素材は、春あさき根岸の里の風物を叙し、「にんげんの赤子あかこを負へる子守り」や「角兵衛かくべゑのをさな童わらわ」などの「わらべ」をみて何故かしらしみじみとした心情を根底にひめてうたわれている。四首目の「天あめのなか」の歌の削除は、前歌と同じ素材である「雪」の重複をさけ、感覚的・直観的な「雪」の把握より「屋上の雪」をうたつた具体の歌の方をのこしている。最後の二首の歌の削除も「日輪」「獅子」の素材の前作との重複をさけ、少しく感覚的、抽象的な歌の方を削除している。

宮益坂

莊嚴しやうげんのをんな欲ほつして走りたるわれのまなこに高山たかやまの見ゆ
風かぜを引き鼻汁はなながれたる一人男ひとりおとこは駈足かきぞをせず富士の山見けり
これやこの行くもかへるも面黄おもなる電車終点の朝あさほらけかも
狂者きやうじやもり眼鏡めがねをかけて朝あさほらけ狂院きやういんへゆかず富士の山見居り
馬うまに乗りりくぐん將校しやうがうきたるなり女難にまがたの相あひか然しかにあらさずか
向むかひには女にまは居たり青あおき麴もちもち童子どうじになにかいひつけしかも
天竺てんぢくのほとけの世よより女人おんな居りこの朝あさほらけをんな行くなり
雪ゆきひかる三國みくに一の富士山ふじさんをくちびる紅べにき女おんなも見たり

(十二月作)

宮益坂は、茂吉のつとめている青山通りから渋谷にむかつてゆくだり坂を称して呼ばれ、もともとこれらの作品は「アララギ」(大2・2)に同題で発表されたものだが、当時「アララギ」内部では

あまり評判はよくなく、石原純はこれらを「花相撲」と称し、一連の書割的で強引な表現をいさめている。だがこの一連はみかたをかえると塚本邦雄が言うように「この『宮益坂』に關する限り、茂吉は決して狭義のリアリズムや、『アララギ』独特の禁慾主義で、みづからを律しようなどしてゐない。だからこそ、八首のことごとくが異端めき、同志連をさへいきり立たせたのだらう。それでよかつたのだ。だが彼は屈した。まるで踏絵でもさせられるやうに、おもしろい歌の数を抹殺する。『茂吉秀歌—「赤光」百首—文藝春秋』と、こうなる。これら、「おもしろい歌」八首の中から「馬のり」と「向ひには」の比較的よくまとまっている二首をのこして、あとの六首を「狭義のリアリズム」の路線において削除するのである。

海邊にて

眞夏の日てりかがよへり渚にはくれないの玉ぬれてゐるかな
海の香は山の彼方に生れたるわれのころにこよなしかしも
七夜癡て珠るる海の香をあげば哀れなるかもこの香いとほし
白なみの寄するなぎさに林檎食む異國をみなはやや老いにけり
あぶらなす眞夏のうみに落つる日の八尺の紅のゆらゆらに見ゆ
きこゆるは悲しきさざれうち浸す潮波とどろ湧きたるならむ
うしほ波鳴りこそきたれ海恋ひてここに寝る吾に鳴りてこそ来れ
もも鳥はいまだは啼かね海のなか黒光りして明けくるらむか
岩かけに海ぐさふみて玉ひろふくれなるの玉むらさき斑のたま
海の香はこよなく悲し珠ひろふわれのころに染みてこそ寄れ

櫻實の落ちてありやと見るまでに赤き珠住む岩かけを來し
ながれ寄る沖つ藻見ればみちのくの春野小草に似てを悲しも
荒磯べに敷くともなき蟹の子の常くれなるに見ゆらむあはれ
かすかなる命をもちて海つもの美しくゐる荒磯なるかな
いささかの潮のたまりに赤きもの生きて居たれば嬉しむかな
荒磯べに波見てをればわが血なし瞬きの間もかなしかりけり
海のべに紅毛の子の走りたるこのやさしさに我かへるなり
かぎろひの夕なぎ海に小舟入れ西方のひとはゆきにけるはも
くれなるの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆくゆらぎ見えずも
月ほそく入りなんとする海の上こよ遙けく舟なかりけり
ぬば玉のさ夜ふけにして波の穂の青く光れば戀しきものを
けふもまた岩かけに來つ靡き藻に虎斑魚の子かくろへる見ゆ
しほ鳴のゆくへ悲しと海のべに幾夜か寝つるこの海のべに

「海邊にて」は、明治四十五年八月十七日から二十九日まで神奈川県逗子新宿海岸に滞在したおりの群作であり、このうち三首を削除したのである。七首目の「うしほ波鳴りこそきたれ」の削除は、前歌の「潮波とどろ湧きたる」との重複を考慮に入れたものである。さらに言えば「海戀ひてここに寝る吾に鳴りてこそ来れ」の晶子調のロマンティズムが「改選」時気になったものと思われる。さらに十六首目の歌は「荒磯べに波見てをればわが血なし」の「わが血なし」という強烈な表現が「わが血如し」わたしの中を循る血の如く」とも、「わが血無し」とも読める不熟な用法のゆえと、あまりに感覚的、幻想的な歌ゆえに削除対象となったものであろう。

十八首目の歌は、もともと初出では「かぎろひの夕なぎ海に小舟入
れ赤き帆、あぐる西洋人かな」(傍点、筆者)となっていたものを
「西方のひとはゆきにけるはも」と改作したものである。この「西
洋人」を「西方のひと」とし、たことにより、みごとにまとまった
一首ではあるが、この「西方のひと」という抽象性が「改選」時
目にはどうにも気になったの削除と考えられる。

両 国

肉太の相撲とりこそかなしけれ赤き入り日に目かげをしたり

川向の金の入日をいまさらにも今さらにも我も見入りつ

猿の肉ひさげる家につきてわが寂しさは極まりにけり

猿の面いと赤くして殺されにけり両国はしを渡り来て見つ

きな臭き火縄おもほゆ薬種屋に亀の甲羅のぶらさがり見ゆ

笛鳴ればかかれとせしもぬば玉の夜の灯ともりて舟ゆきにけり

冬河の波にさやりてのぼる舟橋のべに來て帆を下ろしつ

あかき面安らかに垂れ稚な猿死にてし居れば灯があたりたり

(一月作)

この一連は、兩國界隈の風物をよみこんだ意欲作であるが八首全
部削除された。初出は「兩國のころ」(「アララギ」明45・2)と
未詳の作品で構成されている。

最初の一、二首は、「かなしけれ赤き入り日」「金の入日をいま
さらにも今さらにも」という表現のあまさと、書割の単純な構図のゆえ
の削除とも思われるが、三首目以下の作品は写生も、そのもの「猿

二つの「赤光」(一) 初版「赤光」削除歌の位相一

の肉ひさげる家」「猿の面いと赤くして」「薬種屋に亀の甲羅のぶ
らさがり」「夜の灯ともりて舟ゆきにけり」「橋のべに來て帆を下
ろしつ」「あかき面安らかに垂れ」を描写し、リアルに描かれて
いる。これらの作品は「初版」においては新傾向のものとして異彩
をはなっているが、素材面の異様さと特異さゆえの削除と思われる
。さらに、その素材(「猿」や「薬種屋」)を駆使する当時の
するどい感覚が「改選」編纂時の茂吉の鼻についたものと、思われ
る。

犬の長鳴

よる深くふと握飯食ひたくなり握めし食ひぬ寒がりにつつ

わが體ねむらむとしてゐたるとき外はこがらしの行くおときこ

ゆ

遠く遠く流るるならむ灯をゆりて冬の疾風は行きにけるかも

長鳴くはかの大族のなが鳴くは遠街にして火は燃えにけり

さ夜ふけと夜の更けにける 暗黒にびようびようとうと犬は鳴くにあ

らずや

たちのぼる炎のほひ一天を離りて犬は感じけるはや

夜の底をからくれなるに燃ゆる火の天に輝りたれ長鳴ききこゆ

生けるものうつつに生ける 獸はくれなるの火に長鳴きにけり

(二月作)

木がらしの吹きすさぶ冬の夜ふけ、犬の遠吠えをききつつ創った

一連である。この八首中、最後の「火」のモチーフの三首がけずら
れているのである。この「火」すなわち火事のモチーフは四首目で
「長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火は燃えにけり」で、
まこと遠街の火事がみえるかのごとくりアルにうたわれているので
あるが、これは決して見えた火ではないことが削除された最後の三
首でわかる。

「たちのぼる炎のほひ……犬は感じけるはや」「燃ゆる火の天に
輝りたれ長鳴ききこゆ」「獸はくれなるの火に長鳴きにけり」と
いったぐあいには、事実を見てつくったというより、感覚的に想像的
に、主体を犬の嗅覚に仮託して創った歌である。最後の一首は初
出では「生けるものうつつに生けるけだものは神るる時の感覚を得
し」（傍点、筆者）であったことをおもうとき、これを「初版」で
は無難にまとめたものの、やはりこの最後の三首に共通する想像的
で感覚的な詠風が削除対象になったものと思われる。

木こり 羽前国高湯村

常赤く火をし焚かんと現し身は木原へのぼるこころのひかり
山腹の木はらのなかへ堅凝りのかがよふ雪を踏みのぼるなり
天のもと光にむかふ檜木はら伐らんとぞする男とをんな

をとこ群れをんなは群れてひさかたの天の下びに木を伐りにけり
さんらんと光のなかに木伐りつつにんげんの歌うたひけるかも
ゆらゆらと空気を揺りて伐られたりけり斧のひかれば大木ひと
と

山上に雲こそ居たれ斧ふりてやまがつの目はかがやきにけり
うつそみの人のもろもろは生きんとし天然のなかに斧ふり行く
も

斧ふりて木を伐るそばに小夜床の陰のかなしき歌ひてゐたり
もろともに男の面の赤赤と小雀もあつち山みづの鳴る
雪のうへ行けるをんなは堅飯と赤子を背負ひうたひて行けり
雪のべに火がとると燃えぬれば赤子は乳をのみそめにけり
うち日さす都をいでてほそりたる我のこころを見んとおもへや
杉の樹の肌へに寄ればあな悲しくれるの油しみ出るかなや
はるばるも来つれところは杉の樹の紅の油に寄りてなげかふ
遠天に雪かがやけば木原なる大銀くづ越えて小便をせり
みちのくの藏王の山のやま腹にけだものと人とききにけるかも
(二月作)

この一連には「羽前国高湯村」という注記（「改選」では削除）
があり、最後の歌のあとに「二月作」とあるが、茂吉は明治四十四
年一月二日に母いくの病氣見舞に帰省し、一月十三日に帰京してい
る。その間に蔵王高湯温泉に滞在してうたった作品である。十四、
十五首目の歌は「アララギ」（明45・7）にその初出をみるが、あ
とは未詳のものである。

この一連十七首中九首が「改選」の時削除されているのである
が、おおよそ「こころのひかり」「天のもと光にむかふ」「をとこ
群れをんなは群れて」「にんげんの歌」「山上に雲こそ居たれ」
「天然のなかに」「もろともに男の面の赤赤と」「ほそりたる我の

こころ」等の抽象的で感覺的な把握の作品が捨象され、のこされた歌は「木こり」という題に即した着実な写生歌である。十六首の削除は「大鋸くつ越えて小便をせり」の素材の露悪さが「改蓮」編集時の茂吉の美意識にそぐわなかったものと思われる。

秋の夜ごち

玉きはる命をさなく女童をいだし遊びき夜半のこほろぎ
こよひも生きてぬむらうつらうつら悲しき蟲を聞きほくるなり
ことわりもなき物怨み我身にもあるが愛しく蟲ききにけり
少年の流されびとのいとほしと思ひにければこほろぎが鳴く
秋なればこほろぎの子の生れ鳴く冷たき土をかなしみにけり
少年の流され人はさ夜の小床に蟲なくよ何の蟲よといひけむ
かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに堪へにけるかな
蟋蟀の音にいづる夜の静けさにしろがねの銭かぞへてるたり
紅き日の落つる野末の石の間のかそげきに蟲にあひにけるかも
足もとの石のひまより静けさに顛ひて出づる音に頼りにけり
入りつ日の入りかくろへば露滿つる秋野の末にこほろぎ鳴くも
うちどよむちまたを過ぎてしら露のゆふ凝る原にわれは來にけり
星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりにこほろぎ鳴くも
こほろぎのかそげ原も家ちかみ今ほほ笑ふ女の童きこゆ
はるばると星落つる夜の恋がたり悲しみの世にわれ入りにけり
濼のみず干ゆけばここに細き水流れ會ふかな夕ひかりつつ
女の童をとめとなりて泣きし時かなしく吾はおもひたりしか

二つの「赤光」(一) 初版「赤光」削除歌の位相

さにづらふ少女こころに酸漿の籠らふほどの悲しみを見し
ひとり歩む玉ひや冷とうら悲し月より降りし草の上の露
こほろぎはこほろぎゆゑに露原に音をのみぞ鳴く音をのみぞ鳴く
(九月作)

この一連の初出は「藏王山」(「朱燮」大1・9)と「秋の夜ごち」(「アララギ」明44・9)であり、それらをあわせてまとめたものであり、幼な妻てる子にかかわる浪漫の気の横溢した、だが哀切の情で包みこまれた特徴ある一連である。この中から一見して晶子調(星童派)ともおもえるあまいロマンの歌が三首削除されたのみで、他は削除をまぬがれ「赤光」の面目を保っている。

折に觸れて

なみだ落ちて懐しむかもこの室にいにしへ人は死に給ひにし(子規十周忌三首)
自からをさげすみ果てし心すら此夜はあはれ和みてを居ぬ
しづかに眼をつむり給ひけむ自づからすべては冷たくなり給ひけむ
涙ながししひそか事も、消ゆるかや、吾より秋なれば 桔梗は咲きぬ(録三首)
きちかかうのむらさきの花姿む時わが身は愛しとおもふかなしみ
さげすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしきことありあはれあはれわが少女

栗の實の笑みそむるころ谿越えてかすかなる灯に向ふひとあり

(録三首)

かどはかして逢へるをとめのうつくしと思ひ通ひて谿越えにけり
うつくしき時代なるかな山賊はもみづる谿にいのち落ちせし
おのづからうら枯るるらむ秋ぐさに悲しかるかも実籠りにけり
ひさかたの霜ふる國に馬群れてながながし路くだるさみし
死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを愛しとなげけり
照り透るひかりの中に消ぬべくも蟋蟀と吾となげかひにけり
つかれつつ目ざめがちなるこの夜ごろ寐よりさめ聞くながれ水か
な

朝さざれ踏み冷めたくあなあはれ人の思の湧ききたるかも
秋川のさざれ踏み往き踏み來とも落ちぬ心君知るらむか
土のうへの生けるものらの潛むべくあな慌し秋の夜の雨
秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七面鳥は羽もひろげず
寒さむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥をいたはり兼ねつ
ほそほそとこほろぎの音はみちのくの霜ふる國へと去りぬらむ

一連の冒頭は正岡子規忌に関する歌ではじまり、ついでおのれの境涯詠を録し、谿ごえの折の山賊へとおもいはせ、秋の夜ごろの蟋蟀や秋川のさざれや庭鳥を詠じた日常吟となっている。

これらの中から九・十・十一首目の三首が削除されたのである。九首目は「山賊」の歌のロマネスクの空想性が排除され、つづく十首目の「秋ぐさに悲しかるかも実籠りにけり」という特徴ある把握も「ひさかたの霜ふる國」というややイメージ的把握のうたも排除

されて、この期の自然詠としては、さびしさをたたえる作品群でまとめられている。

遠き世のガレーヌスは春のあけぼの
Ornamentum loci をかなしみぬ。
われは東海の國伽羅の木かげ Plu-
ma loci といひてなげかふ

伽羅ほくのこのみのごとく仄かなるはかなきものか Pluma loci
よ

ほのかなるものなりければをとめこはほと笑ひてねむりたるら
む

「遠き世のガレーヌス……」という、一見かわった長い小題をもつ一連二首は、「改選」では全部削除された。ただし、この小題(詞書き)のみは一つ前(「折に觸れて」)の最後の歌の次にある一三二頁(改選版「赤光」)に一頁をとってエピソード的にこたえている。Ornamentum loci も Pluma loci もともにラテン語で羽毛、陰毛のことをさす。茂吉は多分、先学のローマの医学者ガレーヌスの恋物語をおもい、そのことから東海の国にあるおのれの恋を想い、さらにその相手である幼な妻へと空想をはせながら二首の歌をうたったものとおもわれる。この空想性ゆたかな恋唄は、その空想性のゆたかさゆえに初版「赤光」では異彩をはなしているが、改選ではみごとに削除された。

田螺と彗星

とほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺はぬるきみづ戀ひにけり

田螺はも背戸の圓田にゐると鳴かねどころりころりと幾つもあるも

わらくづのよごれて散れる水無田に田螺の殻は白くなりけり

氣ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べてよるいねにけり

赤いろの蓮まろ葉の浮けるとき田螺はのどにみごもりぬらし

味嗜うづの田螺たうべて酒のめは我が咽喉佛うれしがり鳴る

南蛮の男かなしと恋ひ生みし田螺にほとけの性ともしかり

ためらはず遠天に入れと彗星の白きひかりに酒たてまつる

うつくしく瞬きてゐる星ぞらに三尺ほどなるははき星をり

きさらぎの天たかくして彗星ありまなご光りてもろもろは見入

入り日ぞら暮れゆきたれば尾を引ける星にむかひて子等走りたり

この「田螺と彗星」の一連は、これ自体田螺と伽陵頻伽と彗星におもいはせるといふ仏教説話めいた空想的な作品群である。「改選」時全部削除しないで三首のみにとどめ面目をたもっている。これらの作品については当時の茂吉の思考をうかがわせる資料として「田螺のうた」という一文があり、そこで「實地には田螺を見に出かける」とことと一概に「空想を廃」さないと二点を強調している。茂吉において「実地（実際）」と「空想」は表裏一体であり、実地の中から生まれる空想は理にかなうものと考えていたことが解る。

二つの「赤光」(一) 初版「赤光」削除歌の位相

削除された七首目の「南蠻の男」の歌は、伽陵頻伽が南蠻の男を恋うて生んだ私生児が「田螺」であると解されるように、なかでもとびぬけて空想的な一首である。最後の二首の削除は前歌あたりの「彗星」の歌との重複を気にしてのことであろう。

南 蛮 男

くれなゐの干しほのころも肌につけゆららゆららに寄りもこそ寄

れ(録八首)

南蛮のをとこかなしと抱かれしをたままの花むらさきのよる

なんばんの男いだけば血のこゑすその時のまの血のこゑかなし

南より笛吹きて来る黒ぶねはつばくらめよりかなしかりけり

夕がらす空に啼ければにつぼんの女のくちもあかく触りぬれ

入り日空見たる女はうらぐはし乳房おさへて居たりけるかな

瞳青きをとこ悲しと島をとめほのぼのとしてみごもりにけり

なんばんの黒ふねゆれてはてし頃みごもりし人いまは死にせり

にほひたる臺のうへに白たまの静まりたるを見すぐしがてぬ

しらたまの色のにほひを哀とぞ見し玉ゆらのわれやつみびと

罪ひとの触れんとおもふしら玉の戦きたらばすべなからまし

この一連は初版「赤光」の特徴の一端をになっている詠諷であるが一首のこらず削除された。「南蠻男」の歌が木下全太郎の「黒船」「長崎ぶり」「棧留篇」あたりの詩の影響をうけた空想歌であることと示摘は本林勝夫氏の「斎藤茂吉集注釈」(「斎藤茂吉集」角川書

店」に詳しい。「改選」編纂時において、この南蠻男をモチーフとするエキゾチズムとその男がひとりの女を恋い、やがて別れるというロマネスや「肌」「血」「罪」等の語にみられるロマンチズムが忌避の対象となったものとおもわれる。

をさな妻

墓はらのとほき森よりほろほると上るけむりに行かむとおもふ
木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにつけり
をさな妻こころに持ちてあり經れば赤き蜻蛉の飛ぶもかなしも
目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に戀ふるもさみしかるかな
ほこり風立ちてしづまるさみしみを市路ゆきつつかへりみるかも
このゆふべ嵜にかわけるさび紅のべにがらの垂りをうれしみにけり

公園に支那のをとめを見るゆゑに幼な妻もつこの身愛しけれ
嘴あかき小鳥さへこそ飛ぶならめはるばる飛ばば悲しきろかも
細みづにながる砂の片寄りに静まるほどのうれひなりけり
水さびある細江の面に浮きふむこの水草はうごかざるかな
汗ばみしかうべを垂れて抜け過ぐる公園に今しづけさに會ひぬ
をさな妻をさなきままにその目より涙ながれて行きにけるかも
をだまきの咲きし頃よりくれなゐにゆららに落つる太陽こそ見に
けれ

(折々の作)

これら十四首は幼な妻でる子によせる心情を詠んだものであるが、「墓はらのとほき森よりほろほると」「木のもとに梅はめば酸しをさな妻」というぐあいに自然の物象と幼な妻をたくみにとりこんだ着実な一連である。そうしたなかで、少しくセンチメンタルで観念的な切りとりにかたむきすぎたと思えるものを三首削除している。

壙原行 明治四十一年作

(最初34首略)

天地のなしのまにまに寄り合へる貝の石あはれとことほにして
ほり出すいはほのひまの貝の石ただ珍らしみありがてぬかも
玉ゆらのうれしこころもとはの世へ消えなく行かむはかなむ勿れ
おくやまのの深き岩間ゆ海つもの石と成り出づ君に戀ふるとき
もみぢ葉の過ぎしを思ひ繁き世に觸りつるなべに悲しみにけり
山峽のもみぢに深く相こもりほれ果てなむか峽のもみぢに
もみぢ斑の山の眞洞に雲おり來雲はをとめの領巾漏らし來も
火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りてもみぢをか焚く
天そそる白くもが上のいかし山夜見の願さび月かたむきぬ
まばろしにもの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に月満てりけり

「壙原行」四十四首を称して作者自身「割合に写真風について、習癖の取れたものがあり……私の作歌上一転機だと謂つていい」(『斎藤茂吉集』卷末の記)と言ひ、従来の空想癖からの脱却をほめかしている。この連作四十四首中から、三十七首目の「玉ゆら

のうれしどころもとはの世へ消えなく行かむはかなむ勿れ」という
観念的な作品を削除し、「改選」版では三十二首目に「あまつ日は
山のいただきを照らしたりふかき峽間の道のつゆじも」という写実
的な歌を増補している。

細り身 明治四十二年作

重かりし熱の病のかくのごと癒えにけるかとかひな撫るも
蝸ひぐらしのかなかなかなと鳴きゆけば吾のほそりたりけれ
あな甘うま、粥強ぢやう飯いひを食すなべに細りし息の太りゆくかも
まことわれ癒えぬともへば群きものころの奥がに悲しみ湧くも
やまひ去り癒しみ居ればほのほのに心ぐけくもなりて来るかも
たまたまの現うつしき時はわが命いのち生きたかりしかこのうつつし世に

(以下29首略)

この「細り身」の一連三十五首は明治四十二年六月三十日〜八月
末まで腸チフスを病み、そのため卒業も一年延期というなかでうた
われたものである。

この連作一首目から三首目にむけ「癒えにけるかとかひな撫る
も」「蝸ひぐらしのかなかなかなと鳴きゆけば」「あな甘うま、粥強ぢやう飯いひを
食す」という現実的リアルな描写と自己の病気が対照され、つづ
く四首目と五首目の、やや抽象的な病気の予後の歌が削除されてい
る。「改選」では、四首目にその二首目のかわりとして「おとろへ
て寢床みしどの上にものおもふ悲しきかなや蝸ひぐらしの飛ぶさへ」というまこと
にリアルな写生の歌が増補されているのである。